文化財保護課

群馬県前橋市

大友屋敷Ⅲ遺跡

開発行為（民間共同住宅建設）に伴う

発 掘 調 査 報 告 書

1 9 8 7

前 橋 市 教 育 委 員 会
前橋市埋蔵文化財発掘調査団

序

前橋市は、北に赤城山、西に榛名山を望見する関東平野の北部を市域とした県都である。市域を南から北へ貫流する利根川の清流は市域を潤し、「水と緑と詩の町」前橋として、また古くから「糸の町」として養蚕製糸で栄えてきた市であります。今、北関東一の人口28万を擁し、生涯学習都市を目指し教育、文化、商工業の調和ある街づくりが進められ、中心市街地の再開発事業、土地区画整理事業、前橋工業団地・住宅団地の造成と、槌音高く進められています。当大友屋敷Ⅲ遺跡の所在する利根川の右岸地域も土地区画整理事業による整備や民間の宅地造成による地域開発が盛んに進められています。前橋市元総社町１２街区のこの地は、民間共同住宅の建設に先立って発掘調査を実施したもので、先の大友屋敷Ⅱ遺跡と区画街路を間に置き隣接しています。国府推定地内遺跡の寺田遺跡など多くの遺跡に近く、特に大友屋敷Ⅱ遺跡で検出の溝と比べ類似性の高い溝をＢ軽石下から確認するなどの他、遺存状態が充分ではないが、古墳時代中後期、奈良、平安時代の住居址５軒、土坑１基を確認しました。数多くの出土遺物の中には完形や復元可能な土師器、須恵器など約２０点程検出出来ました。本報告書を刊行するにあたり建築主の鷹尾基久子様をはじめ多くの方々から物心両面でのご協力いただき厚く感謝申し上げます。本報告書がこの地域の歴史解明の資料として少しでも利用される所があれば幸甚であります。

昭和６３年２月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長　関口和雄

例　　言

1. 本書は都市計画法第29条の開発行為（共同住宅2棟建設事業）に先がけた開発予定地の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は前橋市教育委員会のもとに組織された。前橋市埋蔵文化財発掘調査団（団長　関口和雄）の委託を受け、スナガ環境測設株式会社（前橋市青柳町211－1　代表取締役須永眞弘）が実施した。
3. 調査担当者　浜田博一（前橋市教育委員会管理部文化財保護室係長）
   遠藤和夫（同　上　主任）
   新保一美（同　上　嘱託）
   金子正人（スナガ環境測設株式会社埋蔵文化財調査部長）
   白石光男（同　上　第二グループチーフ）
4. 遺跡名、所在地、調査期間及び調査面積は下記の通りである。
   遺跡名　大友屋敷Ⅲ遺跡　略称　６２Ａ－２７
   所在地　前橋市元総社町１２街区３６９０－１
   調査期間　発掘調査　昭和６２年９月２１日～１０月１５日まで実施した。
   遺物整理　調査資料の整理まとめ、など昭和６２年１２月１０日完了
   調査面積　２１０㎡
5. 本調査における出土遺物は、前橋市教育委員会のもとに保管されている。
6. 本書はスナガ環境測設㈱埋蔵文化財調査部が作成に当たり、編集総括を金子正人が当たり、白石光男が執筆と遺構のトレースを行った。佐々木智恵子、角田朱美が遺物の実測とトレースをし、作業事務を柴崎信江が行った。
7. 測量作業の指導は須永眞弘（測量士第52614号）が行い、発掘調査の安全管理に荻野博巳が当たった。
8. 本調査に際して、多大なご協力を頂きました、開発行為者の鷹尾基久子氏や前橋市教育委員会及び地元市民の方々並びに調査及び整理に際して種々と御指導、御助言を賜わった各方面の方々に心より感謝申し上げます。
9. 調査に参加した方々は次の通りであります。記して感謝致します。（順不同）
   今井芳生、　板垣　宏、　須永嘉明、　松岡和香江、河西三明、
   近藤充朗、　小林康典、　石川サワ子、　原沢政雄

凡　　例

1. 遺構の略号

   H－住居址　　W－溝　　D－土坑

2. 実測図の縮尺

   全体図 1／150　住居址 1／60（カマド 1／30）　土坑 1／60　溝 1／80

   土層断面図 1／40　遺物実測図 1／3

3. 現況図は「前橋現形図４２」 S＝１：２５００を用いた。

4. 遺跡の位置の基準　X＝42955.000ｍ　　Y＝－70760.000ｍ

   基準点、国土地理院の三角点及び水準点

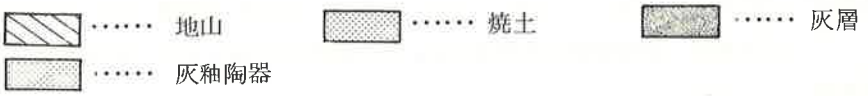
   座標系　第Ⅸ系

   方　眼　４ｍ間隔

   等高線　１０*cm*

5. 土層断面の土色名及び土器類の色調名は「新版基準土色帳」による。

6. 挿図中のスクリートーンの表示は下記の通りである。



目　　次

序
例　言
凡　例
目　次
第１章　調査に至る経緯 …… 1
第２章　遺跡の位置と環境 …… 5
第３章　調査概要 …… 5
　1. 調査方法 …… 5
　2. 経　　過 …… 6
　3. 基本土層 …… 6
第４章　遺構と出土遺物 …… 6
　1. 住居址と土坑 …… 6
　2. 溝 …… 11
第５章　まとめ …… 12
　実測図（１～４） …… 17
　図　版（１～５） …… 21

第一章　調査に至る経緯

前橋市元総社町12街区3690－1に位置する本遺跡の周辺には上野国府推定地域や、国分僧寺・国分尼寺跡等が存在し古代群馬を知る上で大変重要な地域である。

前橋市は昭和20年8月5日の太平洋戦争の大空襲によって市街地の8割を焼失する被害を受けたが、昭和21年10月には中心市街地約300haを戦災復興土地区画整理事業に着手、群馬県と前橋市が施工者になり、いち早く復興に努めると共に、昭和29年には隣接町村を合併し元総社町、総社町などの利根川右岸の地域には、消費都市から生産都市への転換をはかるため都市計画決定を昭和33年の新前橋区画整理事業に続いて、同36年西部第1、同37年には西部第2、西部第3（西部第3総社明神）土地区画整理事業の計画決定がされた。　昭和57年6月には前橋都市計画事業元総社（西部第三明神）土地区画整理事業が実施に移され、県都前橋としてまた広域経済圏の拠点都市を目指して着実に整備されている。かつて7世紀の上野国の中心地上野国府を今、都市計画事業によって再構築している状況です。

新都市計画法は昭和43年（法律第100号）で「都市の健全な発展と秩序ある整備を図り……」を目的に施行され、これを受けて、前橋市は宅地開発指導要項（前橋市告示第10号）で開発行為に対する同意（都市計画法第32条の規定）をするため、開発行為事業の行政指導に当たっている。市教育委員会では「開発行為の土木工事」と「文化財保護法（昭和25年法律第214号）第57条の2（土木工事等のための発掘に関する届出及び指示）」との調整と行政指導にあたっている。大友屋敷Ⅲ遺跡は開発行為者（協議事業者）鷹尾基久子（住所東京都太田区田園調布二丁目47番10号）氏から共同住宅2棟（住宅30戸）の建設を目的に昭和62年7月23日付け宅地開発事業事前協議書が提出（市長あて）され、また市教育委員会教育長あてに同氏より埋蔵文化財確認調査の依頼があり昭和62年7月24日担当職員をもって調査を実施し、7月26日付けで調査結果を依頼者に回答した。

調査結果回答書の抜萃

1. 調査方法

　現地調査、文献調査、地形調査

2. 表面採集調査の結果

　採集した資料なし

　地形観察　　前橋台地

　周辺遺跡　　元総社明神遺跡群、大友屋敷Ⅱ遺跡、堰越遺跡

3. 意見

　申請地には盛土がなされ遺物当の採取は不可能であるが、隣接地は大友屋敷Ⅱ遺跡の本発掘現場である。この現場からは東西方向の溝を検出している。この溝と申請地内を南北に走行している溝との関連が国府域を画するか否かの重要な問題を含んでいる為試掘調査の必要があるものと判断するものである。　　以上抜萃

市宅地開発事前協議審査委員会から文化財保護室長宛７月31日付けで事前協議に対する意見が求められたことについて、８月５日付で推定国府域にかかる重要遺構が予測されるため試掘調査の必要ある旨通知した。また８月１日付で開発行為者（鷹尾基久子氏）から教育長宛に試掘調査の依頼書が提出されたので８月20日に試掘調査を実施した調査結果等は９月１日付けで開発行為者に回答した。

試掘調査結果の回答抜萃

1. 試掘面積　　１２０㎡

2. 調査方法

開発予定地の東西南北に確認トレンチを幅1.2ｍで３条設定した。次にバックホウで確認面まで掘削を行い遺構の検出に勤めた。また地層の観察記録を行い遺跡の有無について検討した。記録資料として写真撮影と測量も併せて実施した。

3. 調査結果

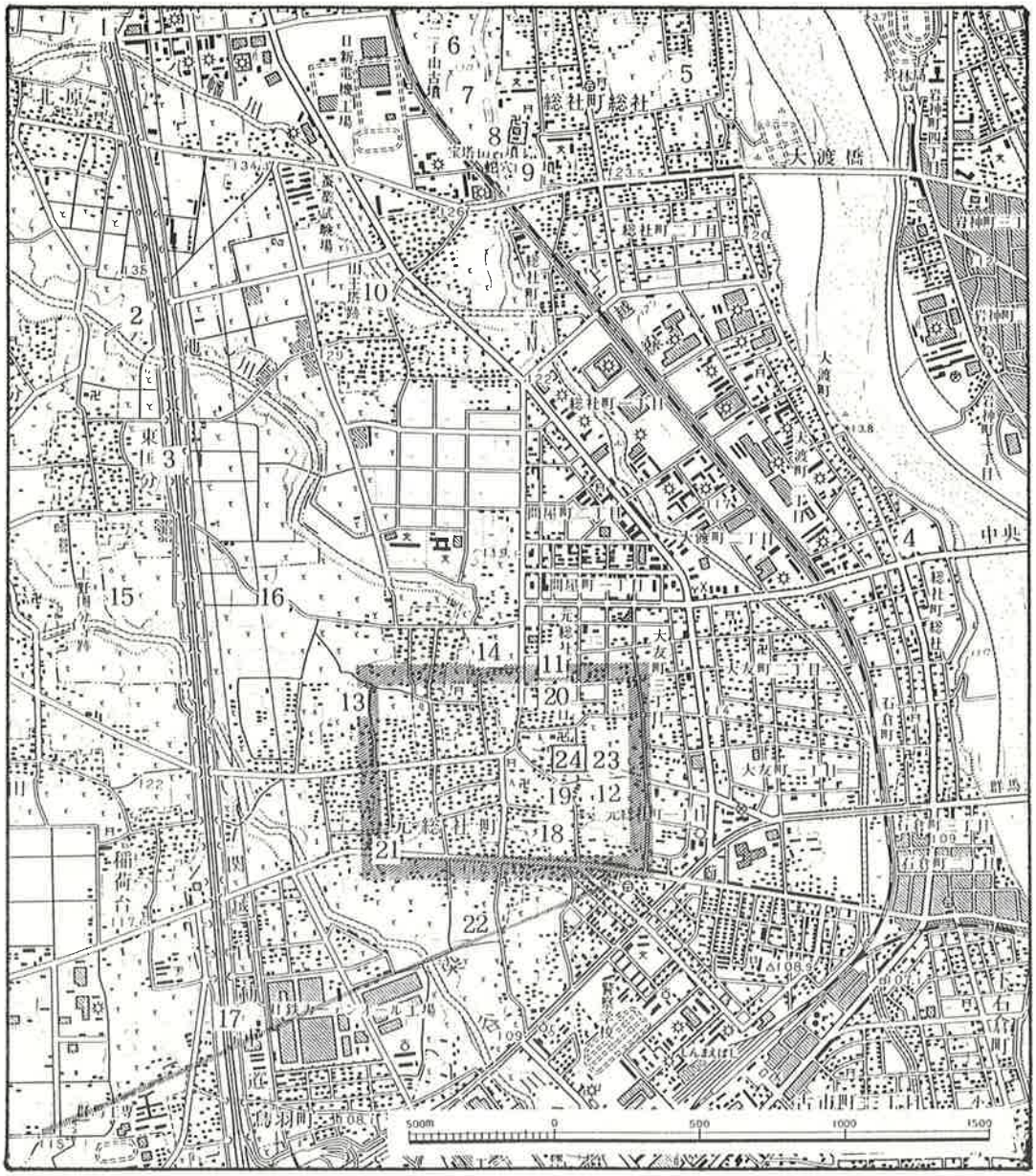
検出した遺構・・・・・	住居址	４軒
	ピット	２基
	溝	１条
検出した遺物・・・・・	土師器片	若干
	須恵器片	若干

4. 意見　申請地の西北に住居址４軒を検出した。うち１軒は区画整理以前の構築物である倉庫の基礎によって残存率が悪いが、３軒は比較的残りの良い状態であった。前述の倉庫のため申請地の大半は攪乱を受け遺構の検出は出来なかった。北側トレンチ西半分の３軒の住居址を中心に発掘調査の必要がある。（以上抜萃）

昭和62年９月７日付で教育長宛に「埋蔵文化財発掘調査について」（依頼）が鷹尾基久子氏名で申請されたのを受けて、昭和62年９月８日付け前教文(発)第195号教育長名で前橋市埋蔵文化財発掘調査団宛「民間開発に伴う埋蔵文化財発掘調査について（依頼）」を受けて文化財保護法（昭和25年法律第214号）第57条第１項に規定する「埋蔵文化財発掘調査」の届出を前橋市埋蔵文化財発掘調査団長名で文化庁長官宛手続きを行った。

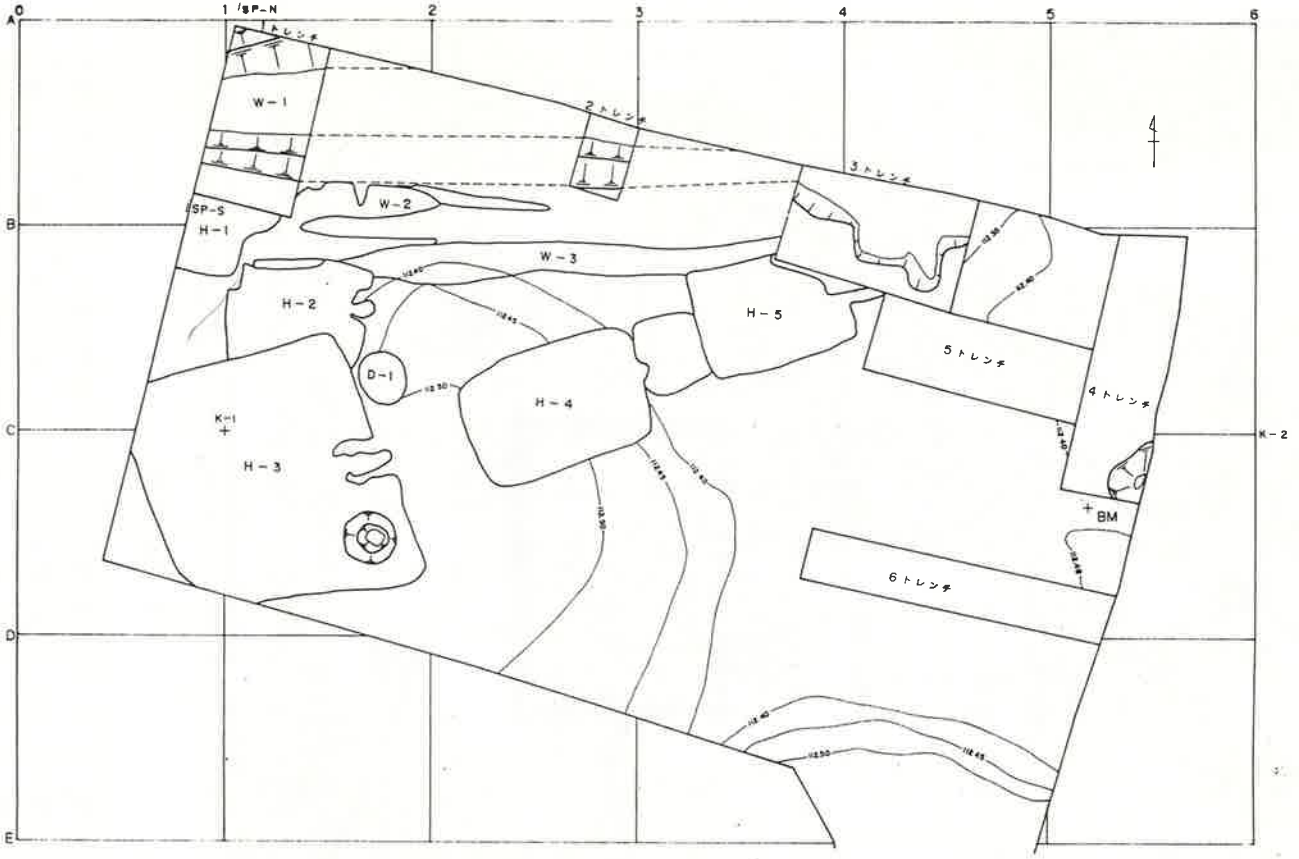
調査面積	２１０㎡（全面発掘）
発掘調査の期間	自　昭和６２年９月２４日
	至　昭和６２年１０月１６日

以上、調査に至る経過を記すものである。



第１図　周辺の遺跡

1	下東西遺跡	2	国分境遺跡	3	国分寺中間地域遺跡	4	王山古墳
5	遠見山古墳	6	総社二子山古墳	7	愛宕山古墳	8	宝塔山古墳
9	蛇穴山古墳	10	山王廃寺跡	11	閑泉樋遺跡	12	元総社明神遺跡
13	草作遺跡	14	上野国府域（推定）	15	上野国分僧寺	16	上野国分尼寺
17	鳥羽遺跡	18	元総社小学校校庭遺跡	19	寺田遺跡	20	閑泉樋南遺跡
21	天神遺跡	22	東山道（推定）	23	大友屋敷Ⅱ遺跡	24	大友屋敷Ⅲ遺跡



第2図　大友屋敷Ⅲ遺跡全体図

座標

K－1　X＝　42955.000ｍ
　　Y＝－70760.000ｍ
K－2　X＝　42955.000ｍ
　　Y＝－70780.000ｍ

標高

BM＝112.500ｍ

0　10m

第２章　遺跡の位置と環境

前橋市はその地形や地質から見て、赤城火山斜面地帯と河床地帯である広瀬川低地、そして、前橋泥流の堆積による前橋台地等に区分できる。本遺跡のある大友屋敷Ⅲ遺跡はこの前橋台地上に位置し、榛名山系の河川である牛池川によって形成された平坦な微高地に立地している。また遺跡の東約300m付近には、市道大友西通線（通称産業道路）が通り、南には主要地方道である前橋・群馬・高崎線が走っている。遺跡の周りは畑地であり、西約400ｍ付近に上野国総社神社を望む。

本遺跡が所在する前橋市元総社町１２街区3690－１番地周辺は、古代上野国の政治・文化の中心的地域であり、「倭名類聚鈔」に記述されている上野国府の推定地域でもあるため、関連ある遺跡の所在が注目される。閑泉樋遺跡や閑泉樋南遺跡また元総社明神遺跡、寺田遺跡等では幅約７ｍの規模を持つ大溝が確認されており、国府域との関わりが注目されている。最近ではこの大溝と交わるのではと考えられる幅５ｍ程の溝が大友屋敷Ⅱ遺跡で確認された。また元総社小学校校庭遺跡では、官衛の一部と思われる柱穴も見つかっており上野国府解明にとって大変重要な地域である。集落址においても天神遺跡、草作遺跡、元総社明神遺跡等で確認調査されており、国府と集落の関係が興味深い。また国府域の近くには官道である東山道や国分僧寺、国分尼寺跡等も存在し奈良時代から平安時代にかけて、古代上野国の中心的様相を帯びた地域であったことが窺われる。

第３章　調　査　概　要

1.　調査方法

前橋市教育委員会は事業者である鷹尾基久子氏の調査依頼を受け大友屋敷Ⅲ遺跡の試掘調査を行った。試掘方法は北と南側各１本ずつのトレンチ（東西方向）と、この両トレンチ間に南北方向のトレンチ（筋堀り）１本を約1.2ｍ幅で設定し試掘を行った。地断は北側トレンチ２箇所南側トレンチ１箇所計３箇所で確認した。試掘面積は約120㎡であり、その結果北側トレンチから住居址、土師器、須恵器等の遺構遺物が確認された為本調査を行うことになった。

本調査は北側トレンチを中心に行い調査面積は210㎡で昭和６２年９月２１日より１０月１５日まで発掘調査を行った。表土掘削の深さは６０～８０cmの間で行いプラン確認後、測量基準を標高112.50ｍ、座標をＫ－１地点でＸ＝42955.000m、Ｙ＝－70760.000m、K－2地点でＸ＝42955.000m、Ｙ＝－70780.000ｍ に設定しこれを基準として調査区を北西隅より緯線をＡＢＣ･･･Ｅまで、経線を012･･･6まで各々４ｍ幅のグリットで設定した。また各グリットの呼び方は北西交点を使用した。溝はトレンチと試掘にて方向、深さ、幅等を確認調査した。住居址はカマドを基準にベルトを設け土層観察を行った。カマドは残存状態のよいものは十字に切りそれ以外は半裁し、土層観察を行いその後造り方を調査した。貯蔵穴、土坑は半裁し土層観察後完掘を行った。出土遺物は覆土中のものは表採として取り上げ遺構に伴うものは遺構ごとに一括としたが、重要であると判断したものは図面に記録後取り上げた。写真撮

影は遺構、全体、空中写真等で行い使用フィルムは白黒、リバーサル、で撮影記録した。

2. 経　過

大友屋敷Ⅲ遺跡の調査期間は、昭和62年9月21日(月)～10月15日(木)まで行われた。実働日数は20日間である。以下日誌より抜萃。

9月21日　～　24日　休憩場所、発掘機材の整理、運搬作業。キャリーダンプによる排土の運搬作業。

9月25日　～　29日　グリット杭打ち作業、表土ジョレン掻き後プラン確認と土層観察作業とセクション図の作成。

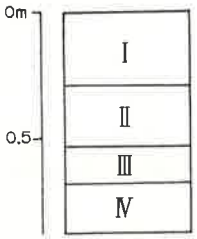
9月30日～10月　2日　プラン確認に沿って住居址、溝の調査開始。写真撮影開始。

10月　3日　～　7日　4号住居、5号住居の平面測量と写真撮影。1. 2. 3号住居の調査、土坑の調査、遺物取り上げ開始。

10月　8日　～　12日　1号住居、2号住居、3号住居、土坑、溝の平面測量と写真撮影。土層観察作業とセクション図作成。各住居址カマドの調査と図面作成。

10月13日　～　15日　全体図1／50にコンタを落とす。気球を使用し空中撮影。発掘機材等の撤収作業。大友屋敷Ⅲ遺跡発掘調査終了する。

3. 基本土層



Ⅰ層　盛り土

Ⅱ層　暗褐色土層　ＢＰ、ＦＰを含み粘性は有るが粒子粗い。

Ⅲ層　黒褐色土層　粘性が有り土質は密で締りは良い。

Ⅳ層　黒褐色土層　ＣＰを多く含み粘性が有り土質は密で良く締まっている。

第3図　基本土層

第4章　遺構と出土遺物

1. 住居址と土坑

a　1号住居址（Ｈ－１）

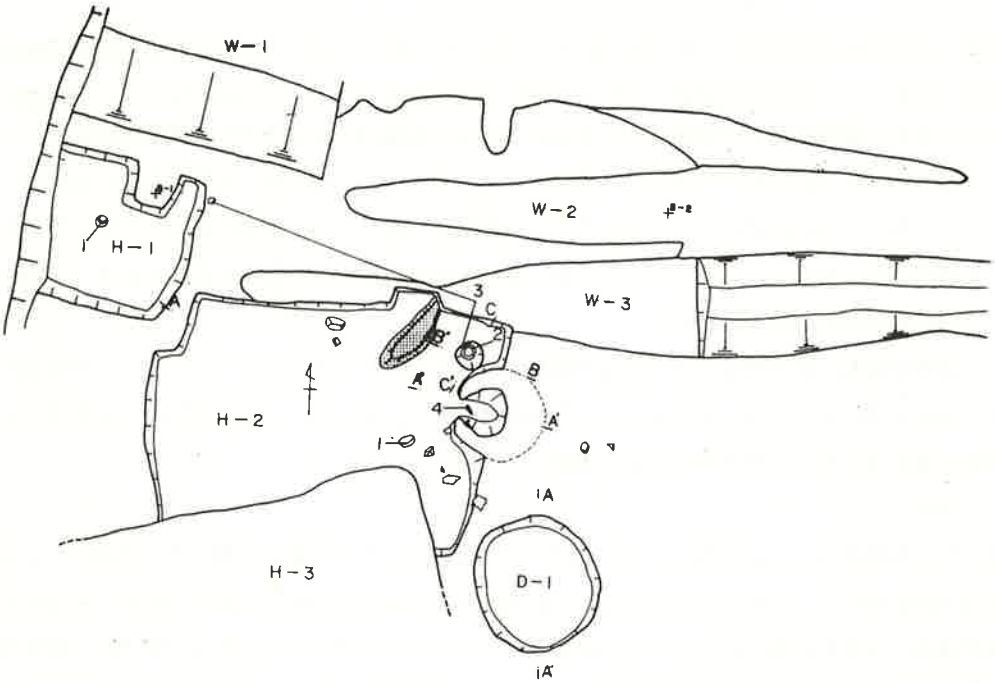
本住居址は西壁Ｂ－１グリット付近に位置し、1号溝により切られている。ほとんどが調査区域外であるが平面プランは方形であると思われる。調査した範囲での規模は南北約1.5ｍ、東西約1.1ｍを測る。床面については締りのない状態であり確認するのが困難であった。

カマドは殆ど形をとどめず焼土範囲を残すのみであった。

出土遺物は須恵器・杯・高台杯・皿等6点ほど数えるがＨ－１に関係あると思われる物は高台杯1点しかなく、その他は覆土中の出土である。時期的には国分期に比定されよう。

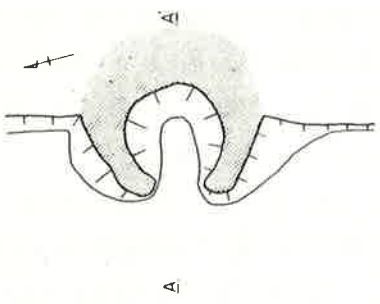
b　2号住居址（Ｈ－２）

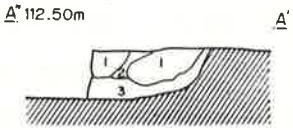
Ｈ－２は調査区西壁よりに位置しＨ－３との前後関係がはっきりしなかったが、Ｈ－３の壁の



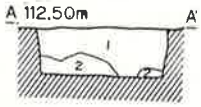
第４図　Ｈ－１・２号住居址と土抗

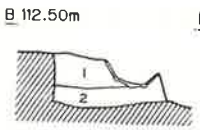
土層注記　（Ｈ－２とカマド）
1.　明褐色土層　粘性が有り土質は密である。ＣＰ、ロームブロック、炭化物を含む。

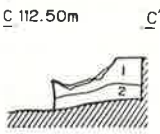




土層注記　（Ｈ－２カマド）
1.　明褐色土層　焼土・ＣＰ、粘土ブロックを含む。粘性はない。
2.　明褐色土層　焼土はあまり含まず、Ｉ層の間層の様である。
3.　明褐色土層　焼土・ＣＰは含まない。粘性は有る。







土層注記（Ｄ－１）
1.　明褐色土層　締まりが良く粘性が有りＣＰを全体に含む。所々に炭化物が見られる。
2.　黒色土層　粘性に富み土質は密である。ＣＰは含まず所々にロームブロックが見られる。

土層注記（Ｈ－２出土遺物）
1.　明褐色土層　粘性が有り土質は締まりがある。ＣＰを含み所々に炭化物も見られる。
2.　暗褐色土層　粘性が有り土質は締まり密である。ＣＰは含まない。

第５図　Ｈ－２カマドと出土遺物

立ち上がりが認められたため、Ｈ－３により切られておりＨ－２がＨ－３より先行する事が確認された。平面プランは長方形を呈し、Ｗ－３やＨ－３が重複しているため正確なプランは確認出来なかったが、調査範囲内で推定すると南北約1.9ｍ、東西約2.5ｍを測り、主軸方位はＮ－113°－Ｅである。壁高はカマド付近では約20㎝程で西に行くに従い低くなる。床面は比較的しっかりしており西方向に傾斜している。カマドは東壁に付設してあった様だが焼土が残っていただけで原形は殆ど留めていなかった。又、脇には炭化物を含む焼土の存在が認められカマドのほかにも火の使用があったと思われる。

出土遺物は総数181点を数えるが復元可能なものは４点であった。またカマド脇からほぼ完形の杯が高杯の上に乗りセットで出土したことは注目される。その他、円板（土師器）も出土した。和泉から鬼高Ⅰにかけての遺物を中心に出土している。

ｃ　土坑（Ｄ－１）

本土坑は調査区域で１基を数えＨ－２とＨ－３の重複するすぐ東脇に位置し上・下端径約１ｍ、深さ約40㎝を測る。底は平坦であり、形状は円形プランで壁面は垂直に立ち上がる。覆土はＣ軽石粒を含み炭化物を疎らに含んでいたが量としてとらえるには至っていない。又、出土遺物は土師器の小片を10点数えるのみであった。

ｄ　３号住居址（Ｈ－３）

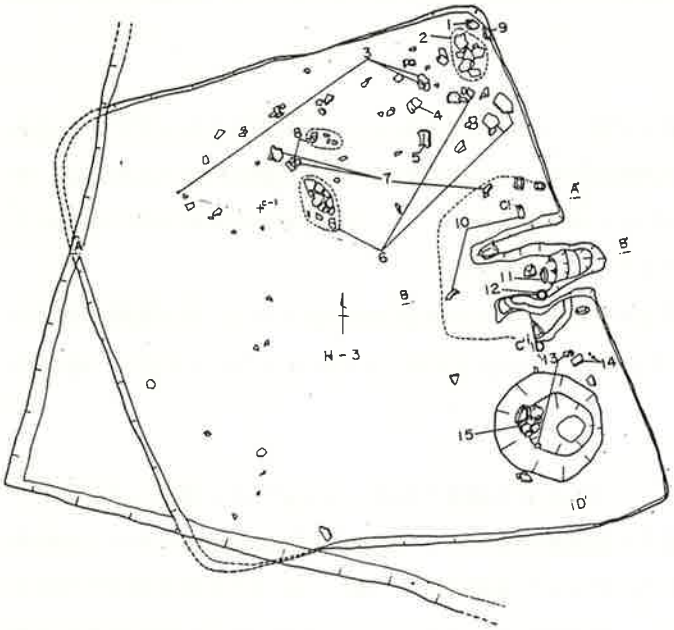
本住居址は調査区南西隅に位置し、本調査区内で一番残存状況の良い住居址であった。北西・南西隅のコーナーは、調査区域外であったため正確な平面プランは確認出来なかったがほぼ正方形を呈すと思われる。規模は南北軸長で約4.5ｍ、東西軸長で約4.5～５ｍを測り、主軸方向はＮ－73°－Ｅである。壁高は約20～40㎝ぐらいであり西壁に行くに従い低くなって行く。床面は平坦であり比較的やわらかい床面で所々にＣ軽石混じりの貼り床が見られる。貯蔵穴は、ロート状に２段に掘られ、円形プランで上幅約110㎝、中幅70㎝、下幅約30㎝を測る。深さは約55㎝程である。また中段付近から土圧により押しつぶされた土師器の甕が出土した。

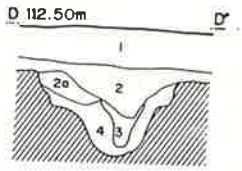
カマドは東壁中央部に付設されており主軸方向はＮ－78°－Ｅである。全長は120㎝、最大幅約90㎝、燃焼部長約50㎝、焚口部長約40㎝、燃焼部幅約40㎝、焚口部幅約40㎝を測り住居址内に長く張り出している。袖石、天井石、支脚石とも凝灰岩の切り石で造られており、袖石、天井石は鳥居状に組まれていたようだ。灰層の堆積状況が良く厚さ５㎜程の灰層がカマドを囲むように分布しておりカマドの使用頻度の多さが窺われる。又、検出状況から見て北から南にかけて力が加わったのか天井石は中央から二つに折れ右袖石は脇に飛ばされていた。

出土遺物は総数639点を数えるが、その内復元可能なものは杯、甕など15点であった。遺物は住居址北壁隅から多く検出された。又、カマド内より２個体の杯が検出されたが、カマドの崩れたときに流れ込んだ様である。Ｈ－３出土遺物は時期的には鬼高Ⅰあたりに比定出来よう。

ｅ　４号住居址（Ｈ－４）

Ｈ－４は調査区中央に位置する。平面プランは東西に長い長方形で南北軸長約3.4ｍ東西軸長約2.5ｍを測り主軸方向はＮ－70°－Ｅである。壁高は約10～17㎝程を測り立ち上がりは直



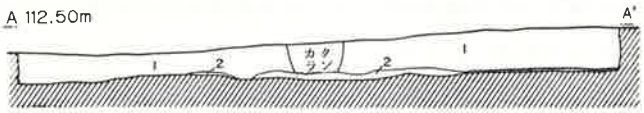


土層注記（Ｈ－３貯蔵穴）

1. 明褐色土層　粘性はそれ程ないが、土質はＦＰを含む。
2. 暗褐色土層　粘性が有り土質は比較的軟かい。ＣＰ、ＦＰ、ロームブロックを含む。

2 a　暗褐色土層　粘性、土質は２層と同じだがロームブロックは２層より多く含む。

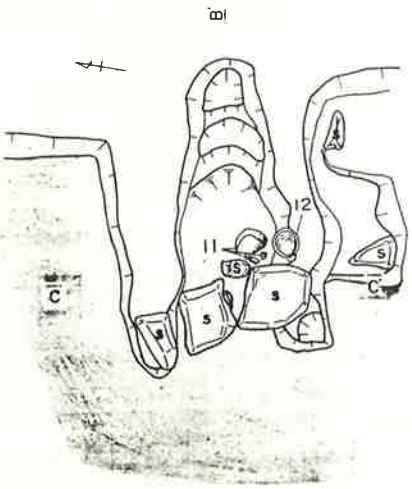
3. 暗褐色土層　粘性に富み土質は密である。ＣＰ、ＦＰは見られない。
4. 暗褐色土層　粘性・土質は３層と同じだがロームブロックを含む。

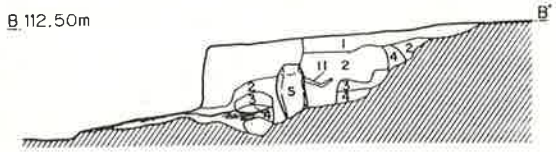


土層注記　（Ｈ－３）

1. 黒色土層　粘性に富み土質は締まり密である。ＣＰを多く含む。
2. 黒色土層　粘性に富み土質は締まり密である。ＣＰ、ロームブロックを所々に含む。

第６図　Ｈ－３号住居址と貯蔵穴





土層注記（Ｈ－３カマド）

1. 明褐色土層　粘性はそれ程ないが、ＣＰと焼土を多量に含む土質は密で締まっている。

1 a　明褐色土層　粘性はなくＣＰ、焼土もあまり含まない。土質締まっている。

2. 明褐色土層　１層よりもＣＰ、焼土は含まれ粘性もある。
3. 淡褐色土層　カマドの灰が混ざっており、粘性はあまりない。
4. 焼土層

第７図　Ｈ－３カマド

線的に立ちあがる。床面ははっきりせず締り方も普通である。カマドは東壁中央に付設されたと思われるが、原形はとどめておらず、焼土範囲が確認できる程度であった。出土遺物は土師器片、須恵器片81点を数えるが、復元可能なものは土師器の杯1点のみであった。時期的には真間期あたりが妥当かと思われる。

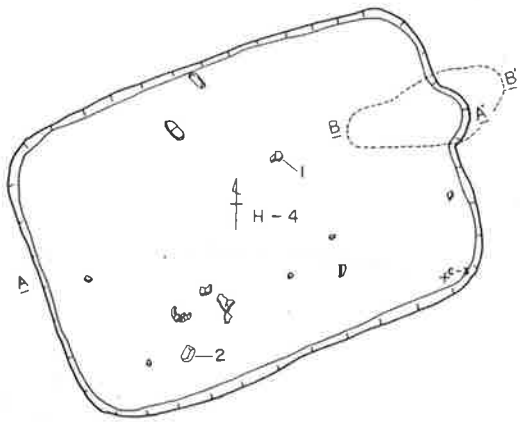
f　5号住居址（H－5）

H－5は、調査区北壁寄りに位置し平面プランは長方形を呈し、主軸方位はN－72°－Eである。南北軸長は約2.9mを測り、東西軸長はW－3と重複関係にあり推定が約2.1mを測る。壁高は約13cm程であるが明確な立ち上がりは確認できなかった。床面は凹凸がありはっきりせず貼り床はみられない。締りは普通である。

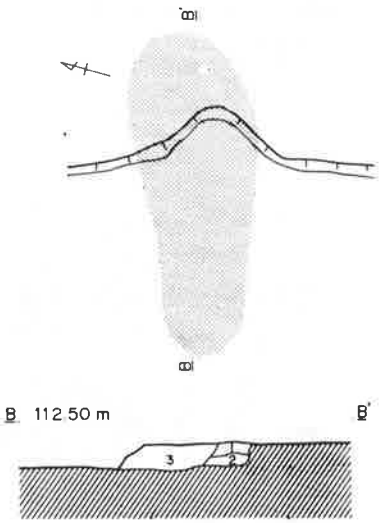
カマドは東壁の中央南寄りに付設されたと思われるが残存状態は良くなく、焼土範囲を残すのみであった。出土遺物は土師器片17点を数えるが復元可能なものは杯1点のみである。時期的には鬼高Ⅰに比定できよう。

g　その他

3トレンチ内には住居址が存在したと思われるが調査の段階では確認できず遺物だけが出土した。遺物は復元でき時期的には鬼高Ⅰに比定出来よう。また表土掘削時に西壁上にカマドの両袖石が検出され住居址の重複が見られた。出土した遺物は657点数えるがその大部分が小片であり、器形的な特徴は判断しかねた。しかし、須恵器においては5点ほど実測可能なものが出土しており、実測は可能ではないが、その特徴が推察できる遺物が出土しており時期考察が出来た。出土遺物はおもに真間期を中心に国分期迄のものが多いようだ。

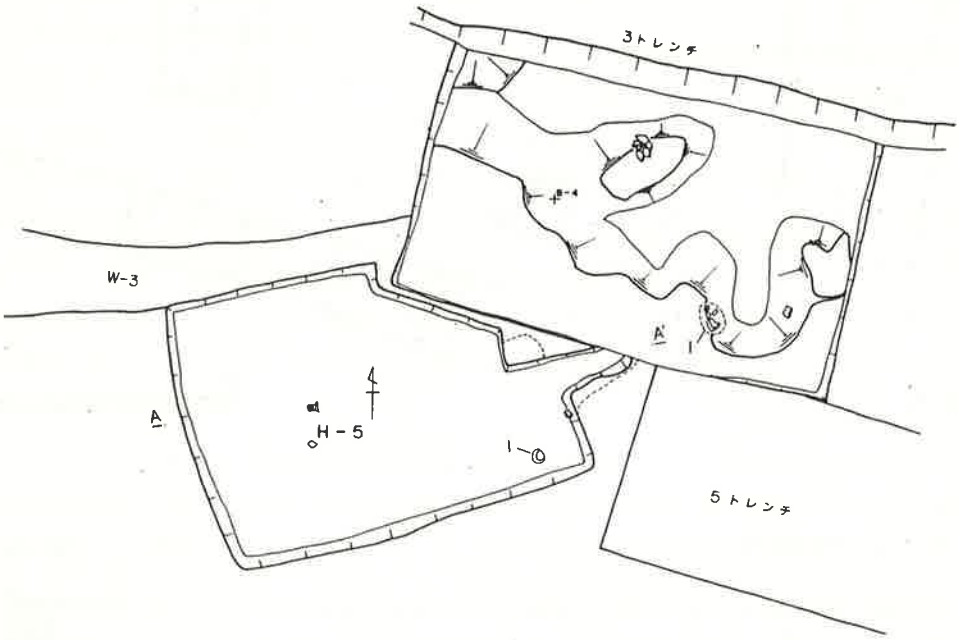


土層注記　（H－4）
1. 暗褐色土層　粘性はそれ程なく、土質は締まっている。CPを含み所々に鉄分の付着も見られる。
2. 黒色土層　粘性が有り土質は密である。CPを所々に含む。



土層注記（H－4カマド）
1. 黒褐色土層　粘性が有り土質は締まり密である。
2. 淡褐色土層　粘性が有り土質は締まり、所々に灰が見られる。
3. 焼土層　焼土の混入が全体的見られるが、それほど多くない。粘性はあまりなく土質締まっている。

第8図　H－4号住居址とカマド



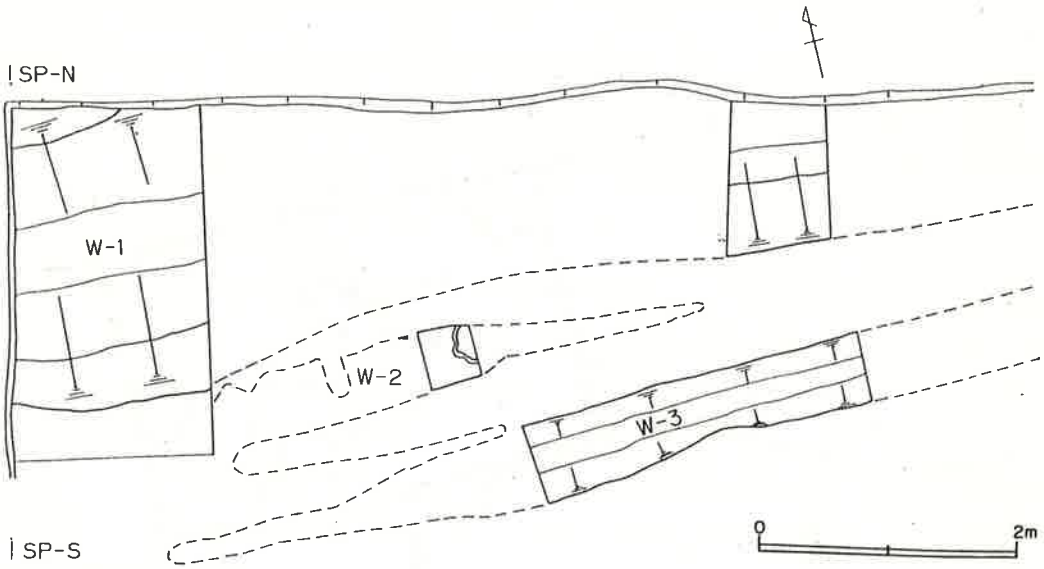
土層注記　（H－5）
1. 暗褐色土層　粘性はそれほどないが土質は良く締まっている。CPを含む。
2. 黒色土層　粘性が有り土質は締まっている。所々に3～4cm程のロームブロックを含む。

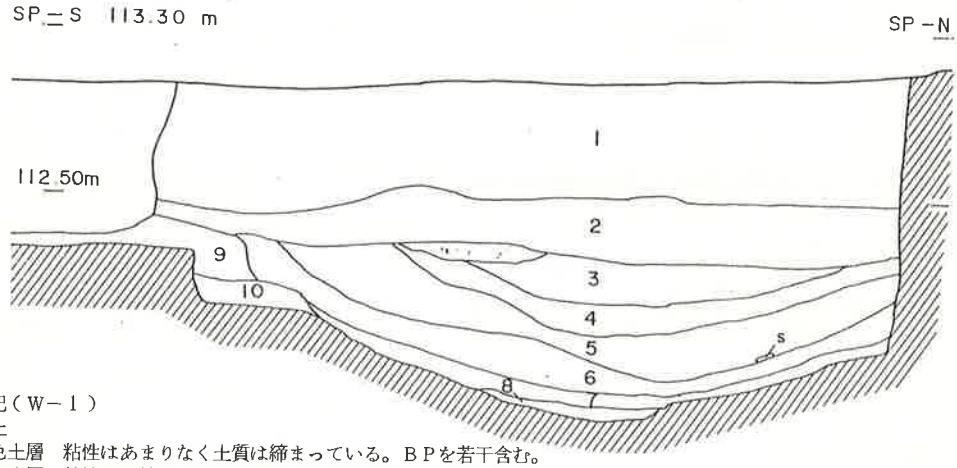
第9図　H－5号住居址

2. 溝

本遺跡では、3条の溝が確認されており調査区北壁側から1号溝（W－1）、2号溝（W－2）、3号溝（W－3）と調査した。W－2とW－3は西壁方向に行くに従い確認できなくなって行く為両溝とも溝と呼ぶには疑問が残る。調査区内での長さはW－2で約9m、W－3で約10m程を測り、出土遺物は検出しなかった。W－1は1トレンチと2トレンチにて確認調査した。調査区内北西隅から北壁中央部に向かってほぼN－90°－Eで走行する。B軽石層は確認できなかったが、土層の2，3層でB軽石の混入が認められる。溝幅は推定で上幅は約3.6～4.0m、下幅は70cm、深さは確認面からの深さで約85cmを測る。調査区内での長さは約8m程である。断面形は緩やかなU字形を呈し、立ち上がりは20°前後で立ち上がる。又中段を有し溝底は固い砂礫質で良く締まっており標高は約111.45mを測る。又、中段付近には、水の流れていた事を示す侵食の痕が認められた。

出土遺物は覆土中から土師器、須恵器の小片56点が数えられるが摩耗しており流れ込みによるものと思われる。





土層注記（W－1）

1. 盛　土
2. 明褐色土層　粘性はあまりなく土質は締まっている。ＢＰを若干含む。
3. 明褐色土層　粘性は比較的有るが土質はＢＰを多く含むためザラついている。
4. 明褐色土層　3層と同じ感じだが、鉄分の付着が見られ締まりも良くなっている。
5. 明褐色土層　粘性は4層より増すが、ＢＰの混入は少ない。
6. 明褐色土層　5層と同じ感じだが、ＢＰは含まない。
7. 明褐色土層　土質は粘土質で密で有り、締まりも良い。
8. 暗褐色土層　粘性は7層より富み、粘土質で締まりも良い。
9. 黒褐色土層　粘土質で土質は密で弾力がある。
10. 黒褐色土層　粘土質で土質は密で有り、所々にロームブロックを含む。

第10図　W－1. 2. 3号溝と土層断面図

第5章　ま　と　め

今回の発掘調査により、確認された遺構は住居址5軒、溝3条、土坑1基であり出土遺物は総数1694点を数えた。

住居址の内訳は古墳時代中期1軒（Ｈ－2）、後期2軒（Ｈ－3、Ｈ－5）奈良・平安時代2軒（Ｈ－1、Ｈ－4）であるが住居址として遺存状態の良いものはＨ－3のみであった。出土遺

物も全体の約３８％を占め、その多さが窺える。Ｈ－２はＨ－３より先行する住居址であるが構築位置は比較的浅い位置に構築されており、この傾向は元総社明神遺跡(注1)等の報告の中でも述べられている。カマドはＨ－３以外の住居址では遺存状態は悪く焼土範囲の確認のみであったが、各住居址とも東壁中央部には付設されていたと考えられる。Ｈ－３のカマドに用いられていた切石は凝灰岩の切石であり、前記の元総社明神遺跡等でもその検出例が見られる。

出土遺物についても和泉期～国分期まで出土しており、その範囲の広さが窮われる。特にＨ－２より出土した高杯と杯のセットは遺存状態もよく、高杯は富士見村田中田遺跡(注2)１３・３７号住居址内より出土した遺物にその類例が見られる。溝については、３条（Ｗ－１、Ｗ－２、Ｗ－３）検出したがＷ－２、Ｗ－３は途中で途切れてしまい溝として機能していたかどうかは調査段階では確認できなかった。

今回検出されたＷ－１は調査区北西隅壁沿いに位置しておりトレンチ調査であったため、正確に確認できない点があったが、ほぼＮ－９０°－Ｅに走行しており、前回調査した大友屋敷Ⅱ遺跡(注3)のＷ－２と同一の溝であると考えられる(注4)。又元総社明神遺跡では溝の位置関係についての報告がされており(注5)、それによると昭和５８～６０年度に確認された南北方向の大溝と東西方向の大溝を基に１町ごとにメッシュで区切るとそのメッシュ上に各々の溝が重なり合うとしている。本遺跡のＷ－１と大友屋敷Ⅱ遺跡のＷ－２を座標を基にこの上に落として見ると東西方向の大溝（閑泉樋遺跡）から南へ４町の位置を東西に走行していることが確認された(注6)。そして、時期的な差はあるが１町と３町南に東西方向に走行する溝の検出例があるため、これらとの関連も興味深い。又、大友屋敷Ⅱ遺跡のＷ－２とＷ－６はＢ軽石下の溝であると思われるため、南北に走行する大溝との関係が注目される。そしてまた、山崎一氏に拠る蒼海城縄張り図（1978）に記載されている。昌楽寺脇の堀跡から東に走行する堀跡と本溝とが重なり合うため(注7)、今後、蒼海城堀跡とＢ軽石層下の大溝を考察する上で本遺跡の存在は極めて重要であると思われる。

最後に開発行為者である（鷹尾基久子氏）と御指導して戴いた方々、また、調査に参加した方々に深く感謝し、ここにまとめと致します。

〈注〉

（注１）「元総社明神遺跡Ⅴ」　1986　前橋市教育委員会

（注２）「富士見村遺跡群　田中田・窪谷戸　見限遺跡」　1986　富士見村教育委員会

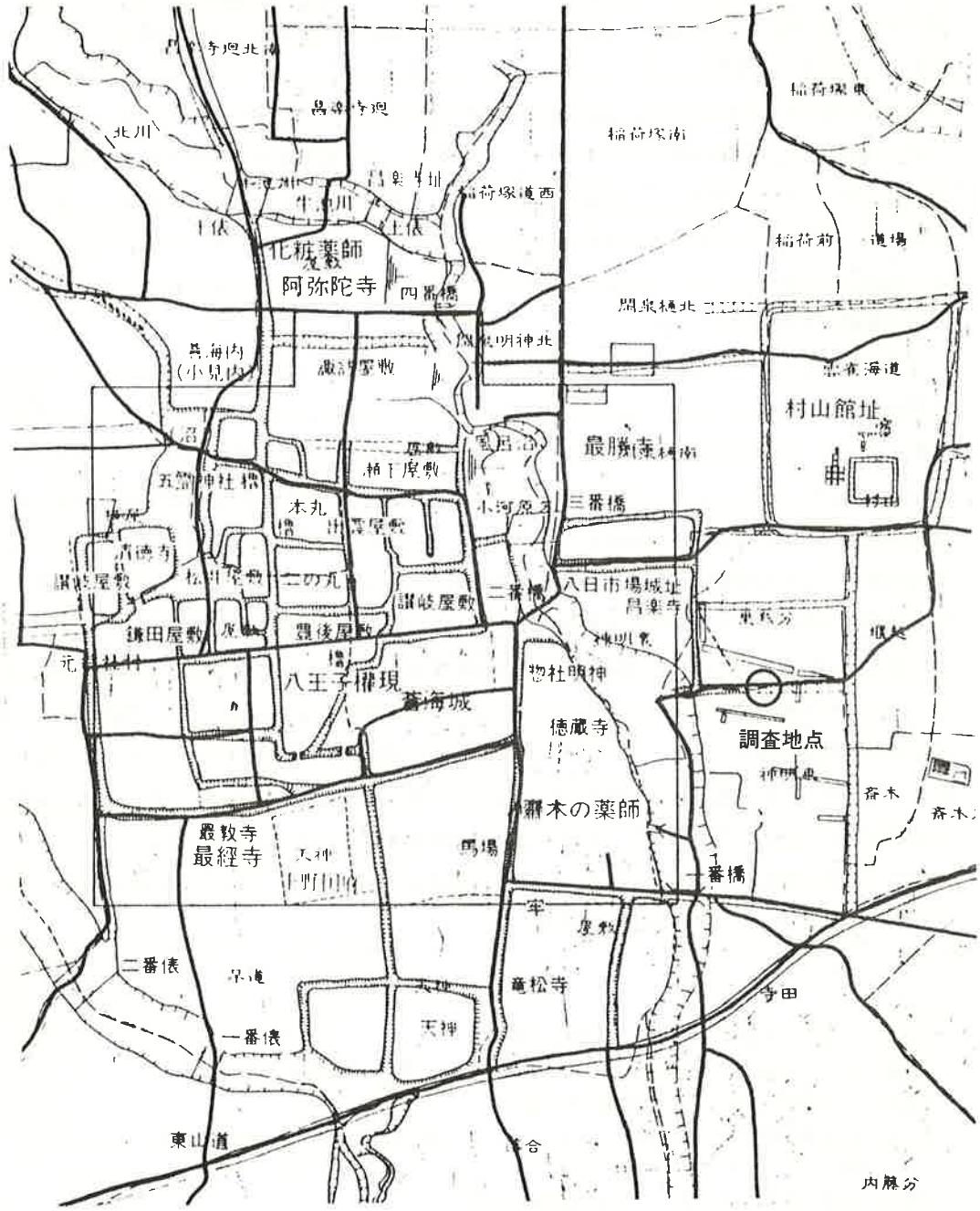
（注３）「大友屋敷Ⅱ遺跡」　1987　前橋市教育委員会

（注４）大友屋敷Ⅱ遺跡のＷ－２は北東方向に走行しており、両溝とも溝底のレベルが 111.5 cm 前後で、同レベルで断面形も類似しているため同一の溝と思われる

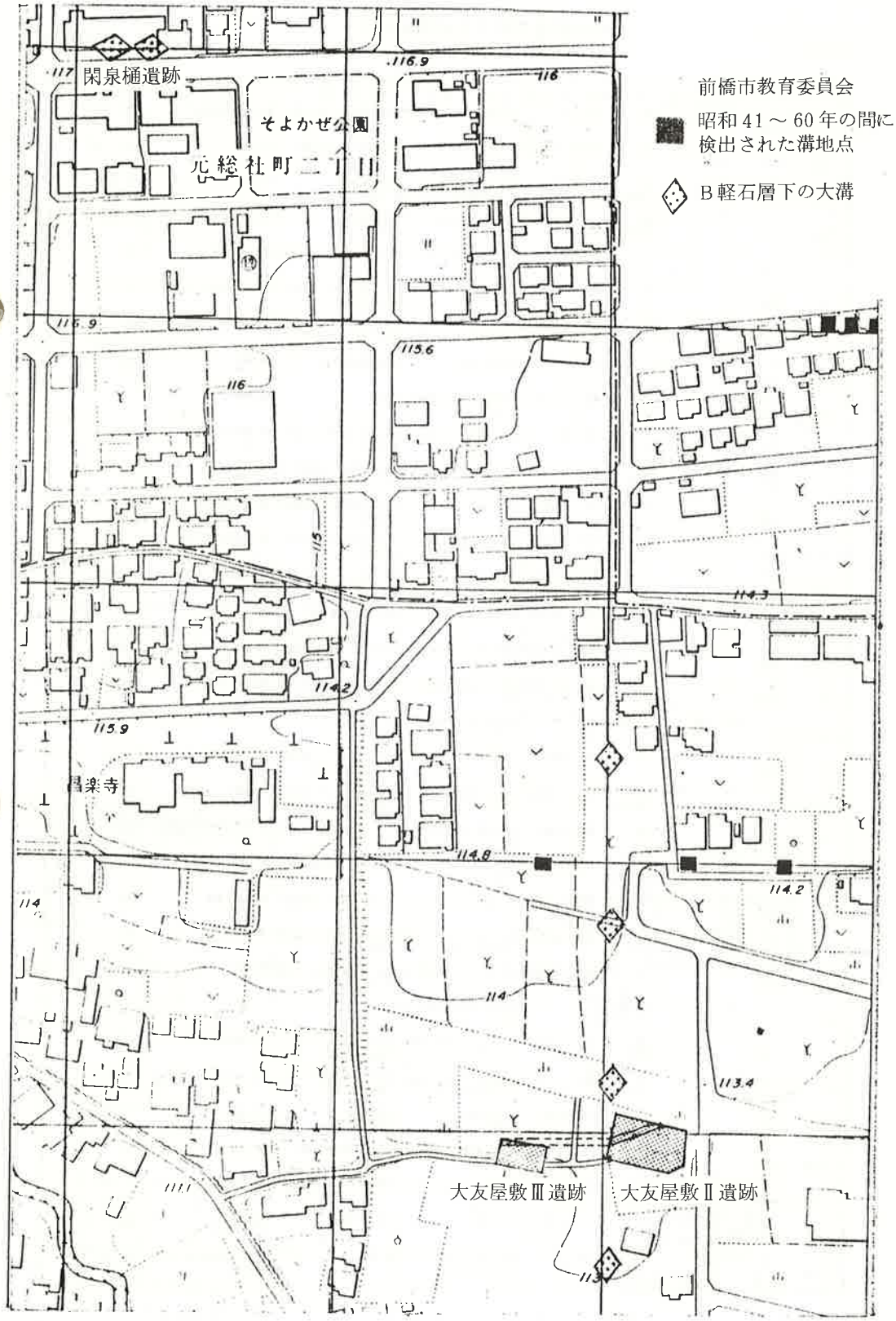
（注５）「元総社明神遺跡Ⅲ、Ⅳ」　1986　前橋市教育委員会

（注６）第 12 図参照　前注の報告書付図より抜萃

（注７）第 11 図参照　「上国野分僧寺・尼寺中間地域」　1986　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団の付図より抜萃



第11図　蒼海城縄張り図


閑泉樋遺跡
そよかぜ公園
元総社町二丁目
前橋市教育委員会
昭和41～60年の間に
検出された溝地点
B軽石層下の大溝
大友屋敷Ⅲ遺跡
大友屋敷Ⅱ遺跡

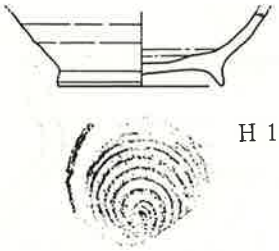
第12図　現　況　図

大友屋敷Ⅲ遺跡出土遺物観察表

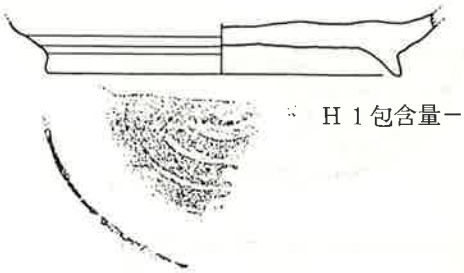
法量の（　）は推定値

番号	出土位置	種類	法量（cm） 口径	底径	器高	胎土・焼成	色調	器形の特徴	（外面）整形	（内面）整形	遺存備考	図版番号
1	H 1-1	埦 須恵器		(6.4)		軟 還元	灰色	貼付け高台 体部やや湾曲	底部右回転糸切り 撫で調整	撫で調整 高台痕有り	底部2／3残	
2	H 1 包含層-1	皿 須恵器		(16.3)		密 還元	灰白色	貼付け高台	底部回転箆切り 撫で調整	撫で調整	底部1／4残	
3	H 1 包含層-2	坏 須恵器	(12.6)	6.0	3.8	軟 小礫を含む 還元	灰色	底部から口縁部直線的に立ち上がる 口唇部外反	底部右回転糸切り 撫で調整	撫で調整	体部～底部 1／3残	
4	H 1 包含層-3	坏 須恵器	(12.2)	6.2	4.3	軟 砂粒を含む 還元	灰白色	底部から口縁部直線的に立ち上がる	底部右回転糸切り 撫で調整	撫で調整	体部～底部 1／3	
5	H 2-1	坏 土師器	12.4		5.4	良 酸化	橙色	丸底で口縁部はやや内湾する	口縁部撫で調整と指による整形	撫で調整後箆磨き	完形	
6	H 2-2	坏 土師器	10.8		6.6	密 酸化	明赤褐色	丸底で口縁部は内湾する	底部と体部は箆削り 口縁部は撫で調整後箆磨き	撫で調整後箆磨き 凹凸有り	完形	
7	H 2-3	高坏 土師器	21.5	坏部 13.5	坏部 7.5	密 酸化	明赤褐色	坏部下位に段差を作り出す	坏部と脚部は箆磨き 坏底部に指押えが見られる	撫で調整後全体に箆磨き	脚部1／2 欠損	
8	H 2-4	高坏 土師器	(17.5)		坏部 (4.5)	密 酸化	明赤褐色	坏部下位に稜有す	撫で調整後箆磨き	撫で調整	坏部2／3残	
9	H 2-5	円板 土師器	縦径 3.5	横径 4.0		軟 砂粒を含む 酸化	にぶい橙色	楕円形を呈し周縁部は摩滅している	箆削り	撫で調整		
10	H 3-1	坏 土師器	12.0		5.1	密 酸化	橙色	丸底で口縁部は内湾気味	底部と体部は箆削り 口縁部は撫で調整	撫で調整後箆磨き	口縁部3／5 欠損	
11	H 3-2	甕 土師器	(19.6)	(28.0)		良 小礫を含む 酸化	にぶい褐色	最大径は胴中央部やや下位にある	縦方向に箆削り 口縁部撫で調整	横方向撫で調整	1／2残	
12	H 3-3	坏 土師器	13.5		5.5	良 酸化	明赤褐色	丸底で口縁部は開き気味である	底部と体部は箆削り 口縁部は撫で調整	撫で調整後箆磨き	口縁部の一部欠損	
13	H 3-4	坏 土師器	(13.8)		5.3	良 酸化	明赤褐色	丸底で口縁部は開き気味である	底部と体部は箆削り 口縁部は撫で調整	撫で調整後箆磨き 摩滅がみられる	3／4残	
14	H 3-5	甕 土師器	14.8			良 砂粒を含む 酸化	浅黄橙色	口縁部は厚く頸部から直線的に外反する	縦方向箆削り 口縁部撫で調整	横方向撫で調整	1／4残	
15	H 3-6	甕 土師器	(31.0)			軟 小礫を含む 酸化	にぶい橙色	胴中央部に最大径を持つ	横方向箆削り 摩滅激しい	横方向撫で調整	胴部2／3残	
16	H 3-7	甕 土師器	15.0			軟 砂粒を含む 酸化	にぶい橙色	口縁部は短くやや開き気味に外反する	胴部箆削り 口縁部撫で調整	胴部箆削り 口縁部撫で調整	口縁部3／4残	
17	H 3-8	甕 土師器	(19.0)			良 小礫を含む 酸化	にぶい橙色	頸部から口縁部は直線的に外反する	頸部から胴部にかけて縦方向箆削り 口縁部撫で調整	横方向撫で調整	口縁部1／2残	
18	H 3-9	石器	縦 11.8	横 5.6		安山岩系		使用面は一面で使用頻度はあまり多くない	握り易い			
19	H 3-10	甕 土師器	17.4			良 酸化	淡橙色	口縁部は肥厚し緩やかに外反する	頸部から胴部にかけて縦方向箆削り 口縁部撫で調整	横方向撫で調整	口縁部3／4残	
20	H 3-11	坏 土師器	13.2		5.1	軟 砂粒を含む 酸化	明赤褐色	外稜有し口縁部は湾曲気味に立ち上がる。	底部から体部にかけて箆削り 口縁部撫で調整	撫で調整	口縁部2／3残	
21	H 3-12	坏 土師器	12.8		4.6	密 酸化	明赤褐色	底部は丸底 口縁部は開き気味	底部から体部は箆削り 口縁部は撫で調整	撫で調整後箆磨き 凹凸有り	完形	
22	H 3-13	坏 土師器	(13.0)		5.3	軟 砂粒を含む 酸化	にぶい橙色	底部は丸底で口縁部はやや立ち気味	底部箆削り 口縁部撫で調整	撫で調整 摩滅痕有り	2／3残	
23	H 3-14	小型甕 土師器	胴部径 (16.6)			良 酸化	にぶい橙色	胴部は球形を呈し張っている	胴部横方向箆削り 頸部指押え	横方向撫で調整	胴部1／2残	
24	H 3-15	甕 土師器	16.8	6.2	26.6	軟 砂粒を含む 酸化	明褐灰色	胴上位に最大径を持ち 口縁部は直線的に外反する	胴部斜め方向箆削り 口縁部撫で調整	撫で調整	完形	
25	H 4-1	坏 土師器	(13.0)		3.8	良 酸化	にぶい橙色	体部は浅く 口唇部は直立気味に立ち上がる	底部から体部は箆削り 口唇部撫で調整	撫で調整	1／2残	
26	H 4-2	石器	縦 14.7	横 6.8		安山岩		使用面は三面で使用頻度は多くない	握り易い			
27	H 5-1	坏 土師器	11.7		4.6	密 酸化	明赤褐色	底部は丸底 口唇部は内湾気味に立ち上がる	底部から体部は箆削り 口縁部は撫で調整	撫で調整後箆磨き	4／5残	
28	トレンチ 3-1	坏 土師器	14.2		5.3	軟 砂粒を含む 酸化	にぶい橙色	底部は丸底 体部から口縁部にかけ開き気味である	底部から体部は箆削り 口縁部は撫で調整	撫で調整後箆磨き 摩滅痕有り	4／5残	
29	試掘-1	蓋 須恵器	11.7		3.2	良 小礫を含む 還元	灰白色	宝珠型の摘みを有す 口縁部短く折れる	回転箆削り 口縁部は撫で調整	撫で調整	1／2残	
30	試掘-2	蓋 須恵器	8.9		2.8	密 還元	灰色	宝珠型の摘みを有す 口縁部は返りを有す	箆削り 口縁部撫で調整	撫で調整	完形	
31	試掘-3	蓋 須恵器	(14.6)		3.5	良 小礫を含む 還元	灰白色	摘みを有す 口縁部は開き気味に折れる	回転箆削り 口縁部撫で調整	撫で調整	2／3残	
32	試掘-4	皿 須恵器				密 還元	灰白色	貼付け高台	底部は撫で調整	撫で調整	底部1／4残	
33	試掘-5	皿 灰釉陶器	(13.8)	(8.3)	3.1	密 還元	灰色	貼付け高台は台形を呈し、しっかりしている	撫で調整	皿中央部近く灰釉が掛かっている 撫で調整	1／4残	

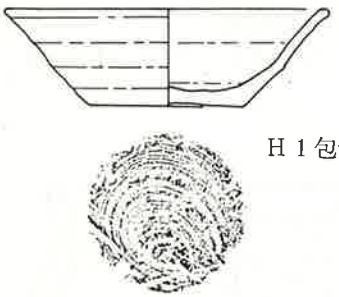
実測図１



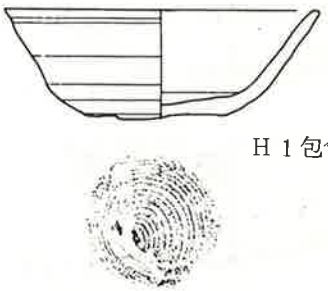
H１－１



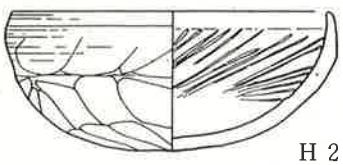
H１包含量－１



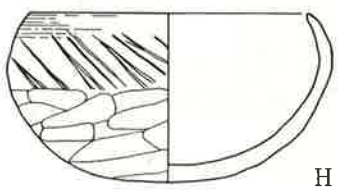
H１包含量－２



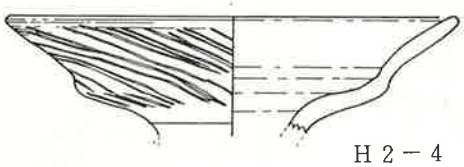
H１包含量－３



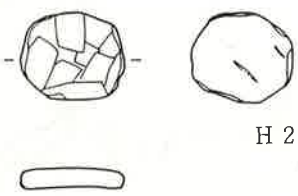
H２－１



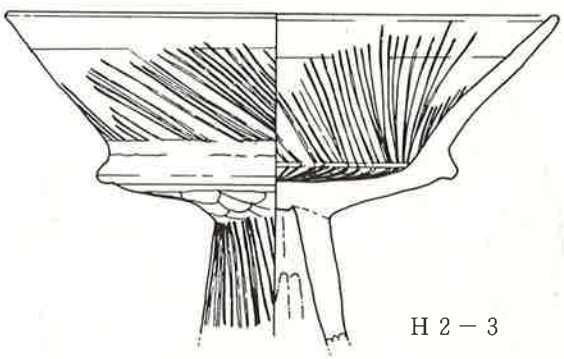
H２－２



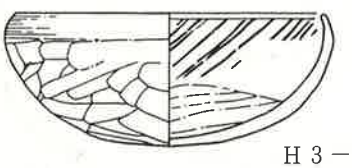
H２－４



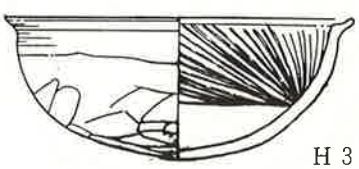
H２－５



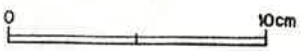
H２－３



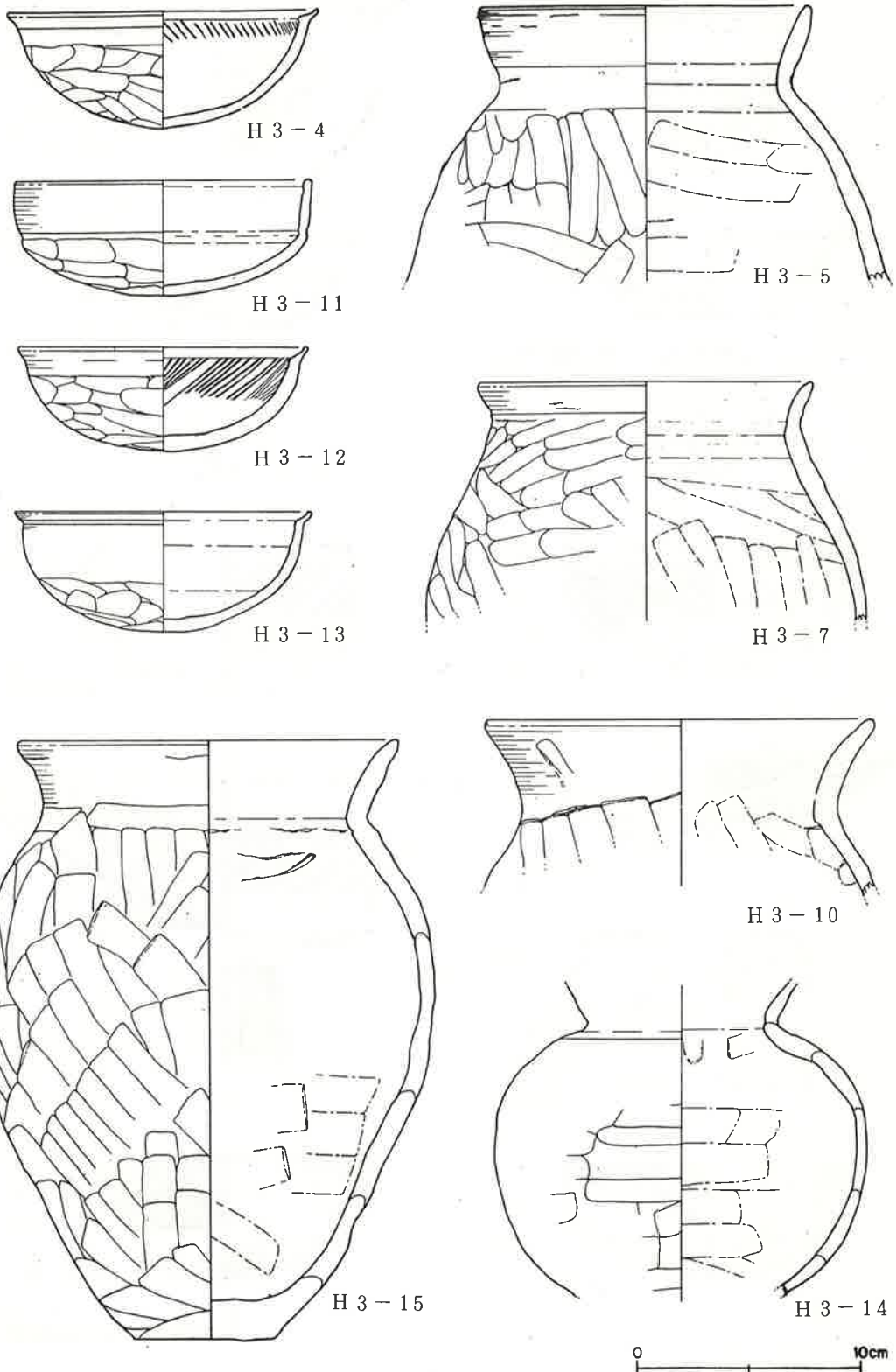
H３－１



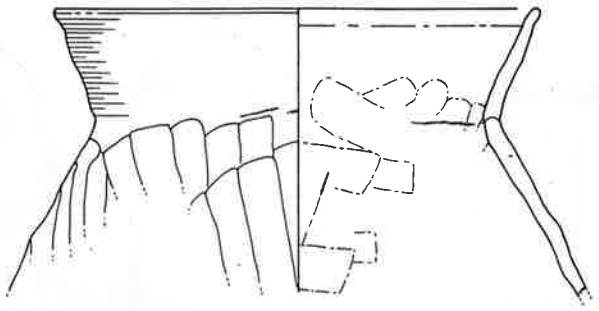
H３－３



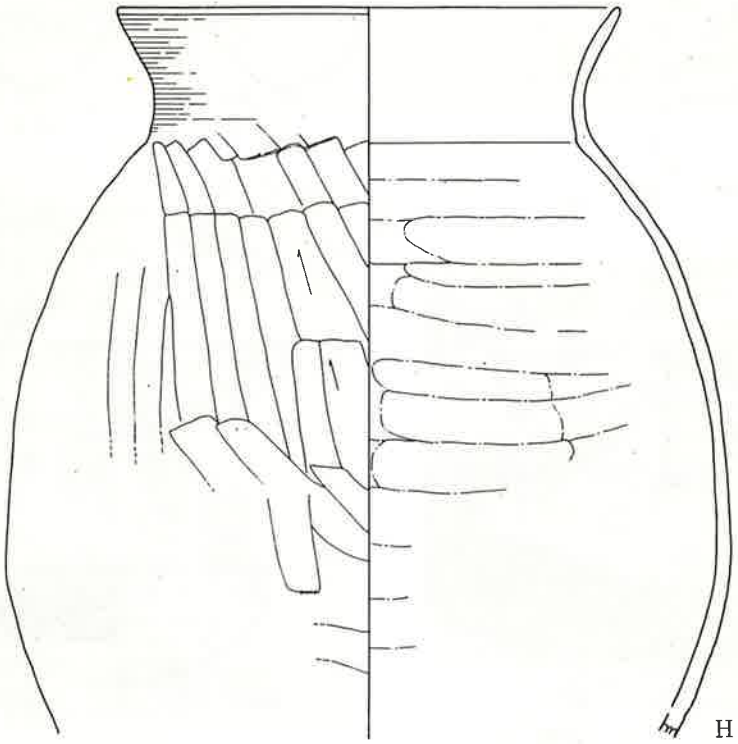
実測図 2



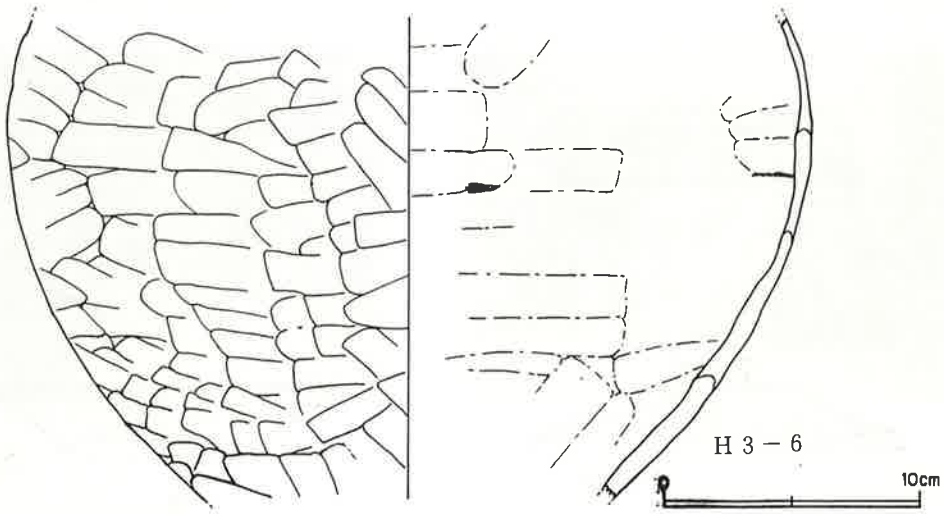
実測図３



H３－８



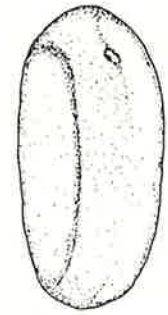
H３－２



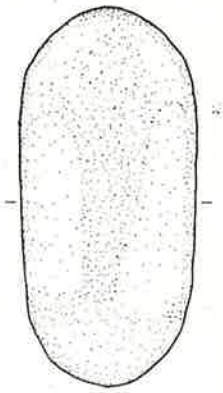
H３－６

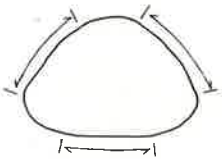
10cm

実測図４

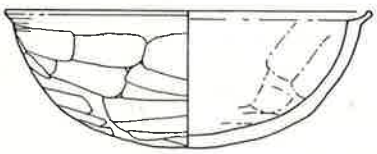


H３－９

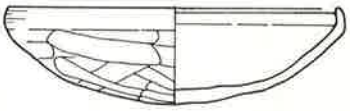




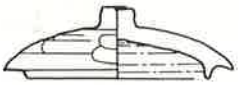
H４－２



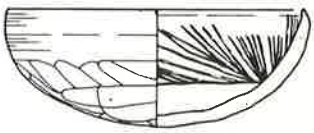
トレンチ３－１



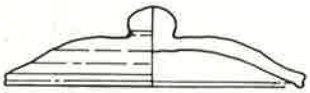
H４－１



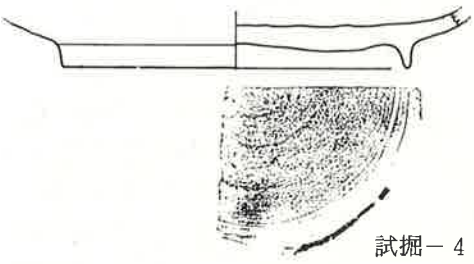
試掘－２



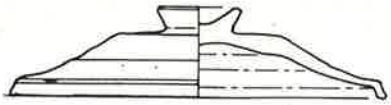
H５－１



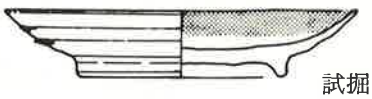
試掘－１



試掘－４

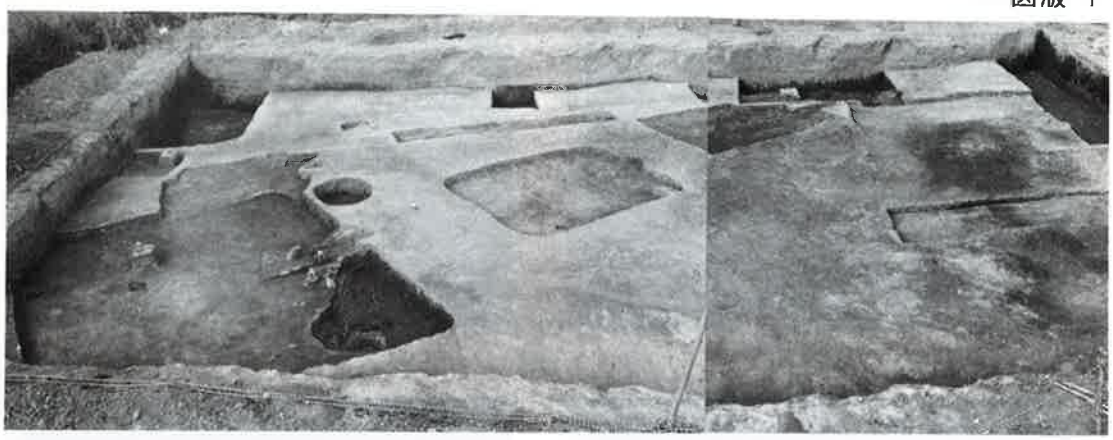


試掘－３



試掘－５

図版 1



遺　跡　全　景　（南より）

遺跡上空（東より）

W－1、W－2、W－3（西より）

1トレンチのW－1（南より）

2トレンチのW－1（西より）

図版 2

H－1（西より）

H－2（西より）

H－2　土器出土状況

H－2　土器セット出土状況

H－2　土器とセクション（北より）

H－2　土器とセクション（西より）

H－3（西より）

H－3　土器出土状況（北壁コーナー）

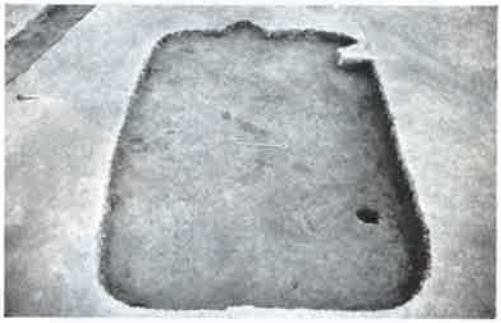
H－3　カマド天井石出土状況

H－3　カマド内土器出土状況

H－3　カマド

H－3　貯蔵穴と土器出土状況

H－4　土器出土状況



H－4　（西より）

H－5（西より）

H－5　土器出土状況

図版 4

H 1 － 1

H 3 － 1

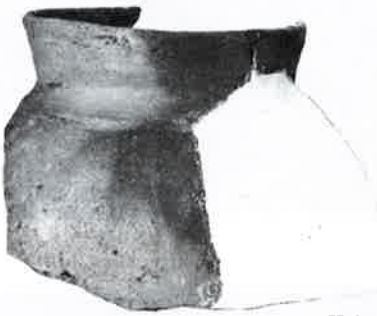
H 1 包含層－ 2

H 3 － 2

H 1 包含層－ 3

H 3 － 3

H 2 － 1



H 3 － 5

H 2 － 2

H 2 － 2. 3 セット

H 2 － 3

図版 5

H３－７

H３－１１

H３－１２

H３－１４

H３－１５

H５－１

トレンチ３－１

試掘－２

試掘－３

試掘－１

試掘－５

大友Ⅲ遺跡

印刷　昭和63年2月15日
発行　昭和63年2月20日
編集　スナガ環境測設株式会社
発行者　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
　　前橋市教育委員会
印刷所　㈲サクラヤ印刷所